

書評 Sinisa Malesevic and Mark Haugaard eds., Ernest Gellner and Contemporary Social Thought

著者	仲津 由季子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	50
号	10
ページ	45-48
発行年	2009-10
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007139

Siniša Malešević and
Mark Haugaard eds.,

Ernest Gellner and Contemporary Social Thought.

New York: Cambridge University Press,
2007, xiii + 274pp.

なか づ ゆ き こ
仲 津 由 希 子

E・ゲルナー（1925～95年）はイスラームないしナショナリズム理論の研究者として広く知られる。が、そのナショナリズム理論が、哲学、社会学、歴史社会学研究やソビエト人類学との対話等、幅広い考究の上に築かれていた事実は、意外に知られていない。近年のヨーロッパではこの反省から、ゲルナーの社会思想や社会構造論を見直す動きがある。生誕80年、没後10年にあたる2005年には、ポーランドのヤギェウォ大学で「ゲルナー——近代の理論家——」と題する国際会議（10月14～15日）が開催された [Kuper 2007参照] 他、アイルランドでも5月21～22日にワークショップ「今日におけるゲルナー思想の政治的・社会的関連性」が開催された（於アイルランド国立大学 [ガルウェイ] 政治科学・社会学部）。

本書はこのアイルランドで開かれた会議をもとに編集された論集である。目的は大まかに、彼の幅広い業績の中から、グローバル化や9.11以後の世界のダイナミズム、近代社会や近代思考の本質について、手がかりを得ることにおかれている。寄稿者は、A・マクファーレン（ケンブリッジ大学社会人類学科教授）、M・マン（UCLA社会学部教授）、N・モゼリス（LSE社会学名誉教授）、T・エリクセン（オスロ大学社会人類学教授）、M・レスノフ（元グラスゴー大学政治学部教授）、J・ホール（マギル大学社会学教授）等、主にナショナリズム研究を通じて、日本でもよく知られている面々である。

また編者S・マレシェヴィチならびにM・ホガードは、アイルランド国立大学政治科学・社会学部のスタッフである。この学部は、社会統合や排他、不平等、ジェンダー、開発政策、権力と闘争等を主な研究テーマとし、この手の意欲的なワークショップを定期的で開催している^(注1)。

以上のような外観をもつ本書の構成は以下のとおりである。

はじめに——主義への知的反乱—— (Mark Haugaard and Siniša Malešević)

第1部 市民社会、強制と自由

第1章 自由と近代性に関するゲルナーの見解 (Alan Macfarlane)

第2章 ヨーロッパ帝国主義における捕食と生産 (Michael Mann)

第3章 権力、近代と自由民主主義 (Mark Haugaard)

第4章 ゲルナー対マルクス主義——関心の中心か東の間の件か—— (Peter Skalnik)

第2部 イデオロギー、ナショナリズム、近代性

第5章 ナショナリズム——ゲルナー理論の再構築—— (Nicos Mouzelis)

第6章 文字と新しい剣の狭間で——ゲルナー、暴力、イデオロギー—— (Siniša Malešević)

第7章 ゲルナーと多文化の窮地 (Thomas Hylland Eriksen)

第3部 イスラーム、ポスト近代主義、ゲルナーの原理

第8章 イスラーム、近代性、科学 (Michael Lessnoff)

第9章 真理、理性、偶然という不安 (Kevin Ryan)

第10章 ゲルナーの原理 (John A. Hall)

「はじめに」では、ゲルナーと各論文の紹介が編者によってなされる。編者の理解ではゲルナーの特徴は3つある。第1に、経験主義と合理主義を擁護し、相対主義やポスト近代主義を批判したこと、第2に、こうしたイズムがどのような社会的条件が揃

ったときに誕生したか、またその後の社会でどのような機能を果たしたかに注視する、社会史的な哲学研究に取り組んだこと、第3に、社会ないし文化が、経済成長と個人に秩序と意味と自由を与える母体となるという思想を抱いていたこと、である。

最後の点についていえば、ゲルナーは、(1)権力闘争が政治領域に限られ、(2)経済的豊かさや温かい親族・社会関係があり、(3)神聖な領域が宗教に限定されるとき、この各領域の外部に「市民社会」という自由が出現すると主張したという。「市民社会」とは、すなわち強制や宗教的ドグマや伝統による支配から自由な領域である。ソ連やイスラームを研究したゲルナーは、この領域の区別こそが、歴史的過去や共産主義、イスラーム社会に存在しない、西欧近代社会に特徴的なものと捉えたとする。その社会は、①生産性は革新(イノベーション)と結びつく、②革新は伝統や迷信に抑えつけられた状況では困難なので、自由を要求する、③この自由民主社会を支えるイデオロギーとしてナショナリズムが出現する、という論理で成立した。これがゲルナーの社会思想ないし構造論の骨子としてまず提示される。

第1章では、マクファーレンが、「信用」概念をとりあげる。信用は封建社会下の人に対して一定の自由を保障するとともに、近代契約社会でも契約の前提となり、財産権を保障するものとなる。ゲルナー理論では封建社会と近代社会が質的に異なるとされるだけで、移行過程が説明されなかった。この信用に移行のヒントがあるのではないかとマクファーレンは提言する。

第2章、第3章は、西欧の社会秩序をひとつの理想として掲げたゲルナーの概念化方法について、それぞれ異論が唱えられている。例えば近代西欧では、国内社会は確かに静逸を守っていたが、対外的には帝国主義的政策が各地で混乱を招いていた。また多くの社会生活や社会変化は、民主的制度と直接関わらないところで生じている。したがってゲルナーの概念化には実証レベルで大いに疑義があると指摘する。

第4章では、チェコの亡命人類学者スカルニクが、ソビエト人類学との関係について論じる。日本では

あまり知られていないが、ゲルナーは1970年代にソビエト人類学を研究していた[詳細は佐々木 2008]。ソ連体制下の学問という閉じられた思考体系の研究を通じて、開かれた社会科学(ポパー「開かれた社会」の振り)が可能になる条件を模索したのである。この関心が先行するあまり、ゲルナーは非教条性を基準にソ連の学者を評価しがちだった、とスカルニクは指摘している。

第5～7章では、ゲルナーのナショナリズム理論に対し、各立場からアプローチされる。第5章では、多くの反例が出された「ナショナリズムには産業化が伴う」テーゼが以下のかたちで再構築される。すなわち産業化は都市への人口集中を求め、人口集中は輸送技術やインフラ整備により可能になる。同時に、中央へむかう人の離脱が均質な伝統的共同体を破壊する。つまり近代国家は解体しつつ統合し、その過程で統合原理としてナショナリズムを動員すると総括できる。第6章は、「近代人の認知枠組みは伝統的思考状態から移行する」テーゼに疑問を付す。近代社会では経験的世界が規範的判断や統合原理から分離されるので移行が生じる、とゲルナーは主張した。だが、9.11以後のアメリカ・ナショナリズムの激昂のように、近代社会でも社会統合神話が働く現象が確認できる。第7章では、「領土をもつ者は国家を建設し、領土をもたない者はディアスポラになる」テーゼへの異論が、少数民族研究の立場から唱えられる。このテーゼへの反証が多い。それは、ゲルナーが、移民問題に具体的に取組まず、所属文化とアイデンティティの関係がきわめて多様なことを十分に理解していなかったことが原因だ、と指摘された。

第8章は、ゲルナーのイスラーム研究に対し、異論を挟んでいる。それによると、ゲルナーは宗教と科学との関係をやや単純化している。西欧で宗教と初期の科学が和合できたのは、自然法によると考えられる。つまり理性によって人間も発見可能とされた自然法(神の法則)の考えが、自然と天文研究を神への接近と信じる初期物理学者の出現を可能にした。対して中世イスラームでも天文学は発達するが、イスラーム法典では文字こそが神聖で、自然世界の

重要性は低い。したがって宗教と科学の関係は選択的理解が必要なのだ、と指摘される。

第9章では、K・ライアン（アイルランド国立大学、当時）から、ポスト近代主義に基づく反論が寄せられた。彼の理解するところ、ゲルナーはポスト近代主義を非合理的な「村の共有草地」住人等と激しく批判した。しかしポスト近代主義の基本は、この共有草地が移動するというより大きな事実への関心にある。合理主義者こそ自分達が共有草地にいると知らずに、自世界をそのまま「世界」と捉える人間である。民主主義の条件を作るナショナリズムが排他現象を伴うのと同じように、合理主義者達も異物の侵入を排除している、と彼は主張する。

第10章では、ゲルナーの個人史に即して彼の原理が説明される。彼はナショナリズムが高まるフランス・コスモポリタン社会で生まれた。その後、中欧を逃れ、英国に開かれた知的自由社会を発見する。しかし当時の英国は相対主義派が主流だった。啓蒙の精神は折角の開かれた社会を他のライバル・イズムから守れていない。この発見が、彼の爾後の問題意識となったという。今日の世界観の乱立は開かれた対話を通じて収斂していく、というのがゲルナーの原理だった。この「開かれた対話」が、本論集が提示するゲルナー思想の根幹となっている。以下、講評である。

日本でも、ゲルナーはナショナリズム理論の専門家として読まれることが多く、隣接領域との関連が明示的でない。本書は、各論文ともゲルナーの業績を受けとめての再立論ないし反論が中心である。そのため「はじめに」でゲルナー思想の概略をつかんだ後、そこを出発点に同心円的に各研究領域の動向（ディシプリン別に社会学・人類学・哲学、地域別にヨーロッパ・ロシア・イスラーム）をわかりやすく俯瞰できる。日本の研究者が、自分がどこに位置し、どの研究と関連しあうのかを知る上で格好の手引きとなるといえるだろう。本書がゲルナーの言及対象を一通りカバーしていることも、その助けとなると考えられる。

他方、現代社会思想・社会科学におけるゲルナー

の位置づけについて明快に編者の解釈を示す章がないため、論集としてのメッセージ性に欠ける。概説から各論へという構成は、これからゲルナーを学ぶ人むけの入門書にも使える仕様である。前書きからすれば、編者の意図は、ナショナリズム論から離れて、ゲルナーをもっと大きく現代社会と関連づけることにおかれていたのだろう。しかしその意味では、多くの面で構成が吟味不足といえる。

まずディシプリン面で、議論が全体的に人文科学系に寄っている。またナショナリズム関連の議論が比重を占めすぎている観がある。政治科学・社会学系のスタッフが編纂しているので、各ディシプリンが内包する開発政策、「持続的発展」等、現代社会と直接、接点の多い社会科学領域と関連づけたり、またそれらとナショナリズム関連の議論を結びつけたりする寄稿があると、より議論に具体性と拡がりが出たのではないかと感じる。

地域別でも、旧社会主義圏の比重が低い（1/10）。自由主義－社会主義－イスラームとゲルナーが対話した以上、この地域の話題がもう少しほしかったように思う。確かにスカルニクはロシア東欧地域の人類学理論に造形が深く、人選として適切だろう。実際、ゲルナー解釈の特徴と問題を正しく指摘していると思われる。だが本論集の趣旨からすれば、ゲルナーが企図した1974～75年の人類学者の東西交流後、ソビエト人類学がどう問題を消化し、変化したのかを追跡する論文があるとよかったとを感じる。

本全体の体裁という面では、まずゲルナーの著作目録がほしかった。本書の各論文は、その分野に精通した人間が、ゲルナーからの引用を中心に思いきった論を構成する展開となっている。明快で興味深い一方、先行文献を念頭に論を辿るのはもちろん、この本を出発点に文献を紐解いていけるような体裁にもなっていない。引用されている文献が、ゲルナーがいつ、どこで何に対して書いたものなのか、一覧として参照できるようにすることは、各論文の関連性をより明確にする意味でも、またナショナリズム論以外の貢献全体を知らしめたいという本書の意図からしても、有意義な作業だったと思われる。

次に「はじめに」の解説にはやや問題がある。ホ

ガードらは、彼が単純な自由主義にも社会主義にもポスト近代主義にも反対という独自の立場を固持した事、その経歴の複雑さ、代表作について概括した後は、各論文の説明に9~26ページと全体の8割を割いてしまっている。前半の情報はGellner (1998, vii-xviii) 等を通じて、すでに公にされている。後半は、各論文を有機的に関連づけることが目的だったと思われるが、結局、何がゲルナー前で、何がゲルナー後なのかの判断は、各読者に委ねられることになった。またライアンの議論に対し、ゲルナーの意図は対話にあり、ポスト近代主義社会理論の非開放性の指摘にあったと考えられるので、不快な主張だと「はじめに」で記している (p.24)。ゲルナー思想の解釈については概ね同意するが、この言明は編者として公平さに欠けると思われる。

最後に類書に対する本書の位置づけが明示されていない。一例として1996年、ボズナン大学より刊行された『ゲルナーの社会哲学』が存在する [Hall and Jarvie 1996]。同論集には本書の執筆陣、ホールやマン、マクファーレンも寄稿しており、章立ても(1)知的背景、(2)民族とナショナリズム、(3)発展の諸類型、(4)イスラーム、(5)科学と呪術、(6)相対主義と普遍、(7)歴史哲学、と似ている。またロシア、イスラーム圏の執筆者 (Tamara Dragaze ロンドン大学教授, Abdellah Hammoudi プリンストン大学人類学教授, Talal Asad ニューヨーク市立大学人類学教授等) も名を連ね、巻末には文献目録一覧があるなど、包括性はこちらの方が高い。同論集刊行後10年の間に、どれだけの議論の深化があったのか。たとえワークショップをもとにしているといっても、一冊の書籍として刊行する以上は、編者の責任で明

確にしておくとうよかったと思われる。

(注1) ワークショップの様子は、以下のサイトで動画を確認できる www.nuigalway.ie/ssrc/programmes/conferences.html (2009年3月16日閲覧)。

文献リスト

<日本語文献>

佐々木史郎 2008. 「ソビエト民族学の理論と西側人類学との対話」高倉浩樹・佐々木史郎編『ポスト社会主義人類学の射程』国立民族学博物館調査報告78 国立民族学博物館 31-64.

<英語文献>

Gellner, Ernest 1998. *Language and Solitude: Wittgenstein, Malinowski, and the Habsburg Dilemma*. Cambridge: Cambridge University Press.

Hall, John A. and Ian Jarvie eds. 1996. *The Social Philosophy of Ernest Gellner* (Poznań Studies in the Philosophy of the Sciences and the Humanities 48). Amsterdam: Rodopi.

<インターネット>

Kuper, Adam 2007. Ernest Gellner as Anthropologist. (Keynote address at a conference held at Krakow University in October, 2005). www.lse.ac.uk/collections/CPNSS/events/Abstracts/HIStoryofPoswarScience/Gellner-Krakow.wps.pdf (2009年3月16日閲覧)。

(東京大学大学院総合文化研究科博士課程)